

武蔵野日曜聖書講筵

わが人生

——天弓九十歳記念——

1994年2月6日

小池辰雄

(詩) 天弓詩篇序歌 兄の死と母の失明 惨憺たる者 聖霊の体験 キリスト信交告白 無即
無限無量 全的な愛 聖書を身体で読む 終りなき福音の戦い 九十歳記念祝賀会挨拶

●(詩) 天弓詩篇序歌

「我が人生」と題してお話をさせていただきます。私のつくった詩があるので、ちよつと読ませてもらいます。(『霊界の星々』1998年刊「天弓詩篇序歌」参照)

天弓詩篇序歌

——告白的自伝詩——

(旧制二高寮歌「あかつき 暁 寄にいしおする新潮の」の歌調にて歌うことを得る(七五調))

1. 明治は三十七の年

白露開戦その直前
まひる 真午の太陽輝ける
やよい 弥生が岡に産声うぶごえを
あ あげて生れにし吾れわなるか。

2. 幼き時に父は去り

ごたり 母は五人の遺児抱え、
お茶の水なる女子校に
教育の道励みつつ
われらをよくぞ育てたる。

3. 田園情緒ゆたかなる

せんた 千駄ヶ谷にて幼年を
一人の友と野に川に
遊びぬ貫きける思ひ出が
心のカメラに今もあり。

4. 小石川区の林町

こうし 高師附属の小学の
前半時代を暮しけり



「よく学びてよく遊べ」
われはよくぞ遊びける。

5. 我は弱虫泣虫の

寔「づくなき」児なりけり

さはあれ真善美に対し

感激性の浅からぬ

夢ゆたかなる少年よ。

6. 西片町に転居して

小学高年暮しける

時しも我は病臥せり

英語を長兄に学びしが

英語の興味津々よ。

7. 同心町の二階屋に

長兄政美と暮しける

附中時代の生きざまが

髣髴として目交に

現前するかな感無量！

8. 英語の実力抜群の

長兄政美はロンドンに

赴任内定ありけるに

サタンに謀略られ北京赴任

悪疫のため仆れたり。

9. 時期は世紀の二十一

北京の空に点りしは

長月二十二の日なり。

小池政美若くして

生命を棄てぬ何ゆえぞ。

10. 上司公森語りけり

「小池政美の喪失は

国家の損失誰か知る

常人四、五年の仕事をば

一年足らずで仕上げたり」

11. 政美の重病に母と次男

朝鮮南満経由して



同仁病院に馳せ往きぬ

すでに高熱、死の床よ

嗚呼悲劇的再会よ。

12. 死の三日前キリストが

白衣を纏って現はれぬ

「愛する母よキリストが

迎へに来臨、ゆるされよ

お先きに失礼いたします」

13. 夫婿亡き世の嶮路をば

永年歩みしわが母は

今や過労と悲涙の身

杖と頼みし長男の

遺骨抱きて帰路につく。

14. 黄海上にてわが母は

失明したり、噫無情！

次男龍二に手を曳かれ

遺骨を抱くわが母が

東京駅に降り立てり。

15. 何たる悲劇ぞ、迎えたる

わが眼は霞みて言なし。

「政美兄上、母上よ」

眼にて叫びしわが胸中

天地晦冥どん底よ！

16. わが青春の暴風雨なり

借家を去って叔父のもと

母と我とは借り住居

高校受験の我れなれば

一高目指して猛準備。

17. 憧憬一高受験には

自信充分ありければ

受験票をば手に入れぬ

されど叔父への責めゆえに

水高受験と母の声。

18. 涙を呑んで水高を



受験、合格トップ級

されば一高も合格のはづ

残念無念悲憤なり

長兄の墓前で泣せり。

19. 水戸高校の時にして

大手町なる内村の

聖書の講義胸をうち

光を浴びて信ぜしは

二十歳に満ため時なりし。

20. 病の波に襲はれて

惨憺たりし水高よ。

聖書とルター、ヒルティーを、

燈火として辿りける

獨り旅路を忘れめや。

21. 東大独文学窓は、

古典の粹たるゲーテ、シラー

ダンテとミルトン、西欧の

詩歌の世界に憧憬れて

日に夜を継いで読み耽る。

22. 藤井の門下五星霜

主の日遵りて貫きぬ。

噫、千九百三十年

内村、藤井仆れたり、

み空に點る巨星二つ。

23. 藤井の信友 塚本の

門弟となりて学びけり

かくて無教会の陣営で

聖書の研究一点張り

観念信仰我もまた。

24. 時期は世紀の五十年よ

阿蘇は霜月三日より

垂玉温泉瀧見荘

聖書講読の集會にて

手島と小池の告白よ。



25. 神キリストに祈り入る

彩雲裂きて聖霊が

われを霊撃したりけり。

その瞬間にわが体軀

宙に浮びて地に伏しぬ。

26. わが全身はみ霊にて

漲り溢れ痺れたり

聖霊降臨、新生よ！

使徒らの次元慕わしや！

生涯を賭けて追及往かん。

27. 十字架聖霊のキリストの

無者たる実存賜りて

左顧右眄なくわれは往く。

この罪びとを抱き給う

無量の愛ぞ力なる。

28. 八八峠を越えゆきて

無尽の涙を霊泉とし、

燃ゆる血潮を霊火とし、

聖霊の霊生を力とし、

天弓詩篇は進みゆく！

●兄の死と母の失明

私の数え5歳のときに、父（正吉 1856～1908年）が亡くなったので、私はほとんど父を知りません。だから、完全に私は母（光子 1869年11月9日～1957年1月19日）に育てられた。母はお茶の水の女学校の国語と数学の先生でした。もともと、松代のひとです。明治2年生まれです。母は非常に勉強家で、17歳の時に江戸に出て勉強したいと親に願ったが、

「女子が独りで江戸になんか行っではいけません」

と両親の許可がでなかった。そしたら、母は夜陰に乗じて、独りで出かけてしまった。追手が母を小諸で捕まえて、

「両親がお帰りなさいと言ってます」

「どうしても帰れと仰るなら、私の首を持って行ってください」

と母は言った。これは母から直かに聞きました。それほど決心が強いので追手も、

「そういうことなら、どうぞ」



と言って、路銀を別にくれたので、母は高崎まで歩いて、とうとう江戸まで来てしまった。そして、女子高等師範学校をトップ級で卒業して女学校の先生になった。

私は本郷の弓町という所で生まれた。お茶の水の幼稚園に近いから、その幼稚園に入りました。ところが、父が居たときには立派な家に住んでいたのですが、母は千駄ヶ谷の借家に転居することになった。幼稚園から遠くなったので、私は幼稚園を中退してしまった。

それで、ぼんちゃんという西方出の友達と朝から晩まで遊んで暮らしていた。そのぼんちゃんというのが大通りでカブトムシが歩いていたのを見つけた。捕まえようとして走って行ったところが、そこへ通りかかった大八車にぶつかって倒れて、後輪に首を轢かれて死んでしまった。その時の光景をまだ私はまざまざと思い出します。ちょうどその時に私の一番上の兄の小池政美が学校から帰ってきて、彼を担いで交番に届け出した。そんな事がありました。

それで、私は独りになってしまったので、お母さんの帰ってくるのが今度は待ち遠しくなった。

私は小学高年の時に急性腎臓炎に罹った。兄（政美 1895年7月15日～1921年9月22日）は旧制一高の生徒だったので、私に英語を教えてくれた。私は寝ていて英語を教わった。それで、学校へ行ったら、実は私が一番英語ができるので、それは長兄のお陰でした。附中時代とは高等師範附属中学校のこと。

私の兄はもの凄く英語ができた。兄政美は東大法学部を卒業後、大蔵省に勤務することになり、英語の実力のゆえにロンドンに赴任する内定となった。ところが上役が自分の知っている人をロンドンに回して、私の兄を北京に回した。北京はその頃衛生が悪く、北京で腸チフスで満26歳1か月で仆れた。非常に犠牲的な非業の死です。

とにかく、私は全く母小池光子に育てられた。母の恩は富士山よりも高く中禅寺湖よりも深いというわけで、私の今日あるのは全くこの母のお陰なんです。その母が、ロンドンに行くはずの兄が北京で仆れてしまったので、年来の過労と悲しみのために失明してしまっ

た。その後、私はずっとお母さんの手を引いて歩いていました。そういう人生です。母の存在なくしては私はない。1957年1月19日が母の仆れた日です。

● 惨憺たる者

私は、一言で言うと、惨憺たる者です。この惨憺たる者がどういうわけか――惨憺たる者であるからかも知れませんが――福音に入った。これは長兄政美のお陰です。彼が内村鑑三の本や雑誌を持ってましたから、それを私は読んだ。サイドラインの引いてあるところは特に感激して読みました。

それで、水戸高等学校のとき、土曜日曜日に東京に帰れるときは、帰ってきて、東京の



大手町の衛生会館で内村先生の話聞いた。内村先生の話は本当に感激して聴きました。私は即ち水戸高等学校在学中に信仰に入ったわけです。いわゆる無教会の流れです。

内村先生は、教会の無い集まりというわけで、「無教会」と言った。その歴史的意思是あ
るけれども、いつまでも

「無教会、無教会」

と言つて、今度は無教会がひとつの題目になってしまふ。それはよくない。やはりエクレシアの一環ですから、教会の一端を承っているわけです。いわゆる無教会主義になったらダメです。福音の世界は絶対に主義化したらいかん。

我々の

「召団」

というのは、内村先生の高弟藤井先生が「エクレシア」のことを

「召されたる者の団体」

という意味で「召団」と訳した。それを先生は使わなかったけれども、私は使わせていただいた。そして、1940年の秋から今日までずっと続いているわけです。倒れるまでやるつもりです。

私は「^{たお}仆れる」と言つて「死ぬ」とは言わない。仆れてもまた起き上がつて「往生」する。

向こうに往つて生きる。「死」という言葉は私は嫌いです。我々は絶対に死なない。

「小池先生はどうとう死んだ」

なんて言わないでください。

「小池先生は向こう側に往つた」

と言つてください。ヒルティが、

「次の世界に行くことは隣の部屋に行くようなものだ」

と言いましたが、全くそういうわけです。キリストから永遠の生命を頂いたのですから、死につこないわけです。

●聖霊の体験

一般のキリスト教界で非常に欠けているものがある。それは聖霊です、聖霊の体験です。キリストの直弟子たちはパウロもヨハネもペテロもみな聖霊の器です。聖霊の土台は十字架です。十字架と聖霊は絶対に分けてはいかん。十字架の土台に聖霊がくるので、十字架なしに

「聖霊、聖霊」

なんて言つたら、ヘタすると悪霊になってしまう。サタンは傲慢の霊ですから、高慢になつたらダメ。我々はどこまでも平伏しの姿です。キリストはゲッセマネで平伏して祈られた。デューラーがそういうように描いている。



「わが信仰」

なんて言って、自分の信仰を私したらダメです。私は、

「信仰なんかありません」

と言う。「しんこう」というのは「信交」と書く。キリストと信じ交わっている世界が本当の現実です。仰いでいたらダメなんだ。

「われキリストの中に、キリストわが中に」

という内在関係が本当の信交の世界です。魂が交わっている世界。魂は「魂之霊」と書く。霊は「ひ」と発音する。受霊という。

私が信交に導かれたのは、仆れた小池政美のお陰です。私の存在はもっぱら母による。私の信交の世界は兄による。同心町の二階家で兄と机を並べて勉強していたけれども、兄は半年で聖書一卷を全部読んでいた。一年で二回読んでいた。ちゃんと机に広げてあるから分かった。英訳の『レ・ミゼラブル』を一週間で読んでいた。非常に読書力があつた。

私の一番上の兄は英語、二番目の軍人の兄（龍二 1898年9月9日～1993年8月19日）は——こないだ95歳で亡くなりましたけれども——フランス語、そこで私はドイツ語をやつた。私は「シャーロック・ホームズ」やミルトンやブラウニングが好きだったから旧制高校は英語科に行きたかったけれども、ドイツ語科に入った。そうしたらゲーテという偉大なものにぶつかったからドイツ語科で良かったと思つてますけれども。

東大のドイツ文学科に入つて、特にゲーテを読んだ。木村謹治教授はゲーテの専門で、ゲーテに心酔して講義をしていた。非常に感銘深かつた。ゲーテは大きい。ダンテとゲーテは西欧の二大詩人だ。ダンテの『神曲』は、私はゲーテの『ファウスト』よりも好きです。『神曲』は本当に素晴らしい。地獄・煉獄・天国の三界を遍歴する構造になっています。ダンテは大変な詩人だ。イタリア語ができれば、イタリア語で読みたい。藤井先生もダンテは好きだった。全詩が福音的な構造です。ゲーテは現世的福音、ダンテは来世的な瞑想の詩人です。ゲーテは現実的。ダンテをしてダンテたらしめたのはベアトリーチェだから、やはり女性の力というのはい。ゲーテも勿論で、

「永遠に女性的なるものが我らを導いてゆく」

という終句で『ファウスト』は結んである。

哲学ではダメです。文学は真理を非常に豊かに表現する。聖書そのものも文学だから。旧約は歴史文学だ。聖書の詩篇は素晴らしい。あれはもともと歌です。詩篇ではなく歌篇なんだ。

●キリスト信交告白

我々の信交の歴史的な基礎を築いたのは宗教改革者マルチン・ルターです。ルターは詩人でもある。プロテスタントの最初の作家です。ルターはキリストの直弟子の使徒たちを非常に敬愛していた。特にパウロです。新約聖書の別な意味での中心はパウロですから、



パウロの手紙はよく読んでください。それから、ヨハネ。もちろん、ヨハネは最後に黙示録で素晴らしい花を咲かせた大変な使徒です。パウロとヨハネとペテロ、この三人はそれぞれの特色をもっている不思議な三人だ。三位一体という言葉があるけれども、パウロとペテロとヨハネがそれぞれの特色をもつて新約聖書という建物を構成しているわけです。

キリストを説明したらダメです。我々はどこまでも告白です。信交告白です。アウグスティヌスの『告白』というのものもある。あれは素晴らしい。集会というものは、我々はどこまでも、体験せしめられていることを告白する。教えようという意識はいかん。学校でも本当はそうなんだ。生徒に教えるのではない。生徒と一緒に真理を学ぶ。

いろいろ語りましたけれども、私が今日一番言いたいのは、私の母なんです。父を知らない私は、幼年時代にお母さんが帰ってくるのを門の外で待っていた。お母さんの帰ってくる姿を見ると、走って行った。母は私たち五人を、お茶の水の先生をしながら、よく育ててくれました。終りのころは、過労で御飯が食べられなくなつて、お粥やパンを食べていました。母のことは言葉にならない。私が今日在るは全く母のお陰です。母は正直、よく働き、よく耐え、よく導いてくれました。さつき歌った讃美歌87番「恵みの光」は母の特愛の歌です。

「めぐみのひかりは わがゆきなやむ

やみ路を照らせり 神は愛なり。

われらも愛せん 愛なる神を」

(第一讃美歌87番「恵みの光」)

母は失明していたから、この歌が好きだった。けれども、母は自分が失明したことを一遍もかこつたことがない。小言を言つたことがない。本当です。

「ああ、また見えないな」

なんてことを一遍も言わない。兄の犠牲的な死と、母の失明は無言の私への伝道でした。

いずれ詩の上で私は書きます。私は全部、詩の上で告白しますから。大きな詩を今、書きつつあるわけです。長さでいうと、ダンテの神曲くらい、或いはそれ以上になるかも知れません。

●無即無限無量

キリストから賜った使徒的な信交、これを我々は証言せざるを得ない。一番結構な証言は、生活そのものです。何を書くか書かないか、ではない。ところが、生活そのものは私は惨憺たるもので、惨憺たる者が、

「しかし、惨憺たる者だから、キリストの恵みはかくの如きものである」

という、逆説的な表現というわけです。身証です、身をもつて証しする。キリスト教ではない。キリストは教えではない。キリストは、



「われは道なり」

と仰った。キリスト道です。道は我々一人びとりが自分の足で歩くもの。歩かなければ福音は分らない。本当に生活をしなければ分らない。自分には何ありません、みな上からの賜物たまものです。キリストは、

「われ何事をも為し能わず。私は何事も言えない。神さまが言えるということを言っている。為せということをさせられている」

と仰った。キリスト自身が、

「自分はダメなんだ」

と言っておられる。だから、私はキリストのことを、

「無者」

と言う。何者でも無い者。自分をサムシングにしない。ナッシングだ。

「在れども無きが如き者だ」

ということ。私はキリストからこの無を賜った。十字架で無を賜りました。私は自分ではなかなか無になれない。成ったって、たかが知れている。

ところが、相対的な人間小池はキリストから無を――罪なき世界を、我なき世界を、無我の世界を――賜った。この無は虚無ではない。この無は即無限無量なんです。

「無即無限無量」

というものをキリストからいただきました。無限無量とは何かというと、これは聖霊の世界です。無は十字架です。だから、さつきから、

「十字架と聖霊は分けられない」

と言っている。十字架で無者にされた。罪無き者にされた。完全に贖われた。過去・現在・未来の私は贖われております。相対的な人間小池なんて問題にしたってしょうがない。自分の信仰なんて顧みたってしょうがない。

「何ありません」

と。そうすると、上からの、凄く力がやってくる。力が、光が、生命がやってきて圧倒される。だから、

「私はキリストに圧倒されて生きている」

とハッキリ言えます。よく「私の信仰はまだで……」なんて言うが、私の信仰なんてことを思ふな。キリストの信が、キリストの愛が、キリストの光が、キリストの生命がやってくる。だから、圧倒される。圧倒されて生きている…(異言)…これはもう圧倒されているから、言葉にならない。普通の牧師さんたちは、聖書をいろいろ研究して、いろいろ説明しているでしょう。ご苦労さんな話だ。聞いていてあきてしまう。

「これはどういう意味ですか」

なんて、意味ではない。意味の世界ではない。響きの世界なんです。音楽だ。「ふくいん」(福



音」の「いん」という字は「音」という字だ。福^{さいわい}なる音、恵みの音だ。

●全的な愛

「母なる大地」という言葉がある。大地は一切のものを担っている。女性が歴史を担っているようなものだ。歴史を本当に動かしているものはむしろ女性の方だ。

「雄弁は銀にして、沈黙は金なり」

という。女性はその沈黙の方の世界。そして、女性の特色は愛です。男は義。義と愛とは離すことができないけれども、愛が土台です。

マグダラのマリヤは、キリストがいよいよ十字架に架かる前に、ナルドの香油の壺を割って、キリストの頭から全部注いだ。あれが本当の愛です。キリストはそのことを、

「福音の宣べ伝えられる所では、この女の行為も伝えられる」

と言われた。

「再び使わないから、全部あなたに注ぎます」

という、全的な愛です。キリスト自身が非常に感激された。

人間は全的に生きなければダメです、部分的では。その行為が全身的でないと。その言葉が、その行為が全身的、全的であること。その瞬間に全部自分を打ち込む。

「今ここに於て」

という世界です。「では、明日やるよ」ではダメです。明日を思っているのはダメです、今日そのものを永遠としなければ。

「闇の夜に鳴かぬ鳥^{からす}の声きけば生まれぬさきの父をしぞ思つ」

という白隠の歌がある。「闇の夜に鳴かぬ鳥の声をきく」という境地が魂の世界にないとダメですよ。ゴタゴタ説明する世界ではない。闇の夜に鳴かぬ鳥の声が聞こえるかという。

「声前一言、千聖不伝」

という言葉がある。

「声の前の一つの言葉は千の聖^{ひじり}もこれを伝えることができない」

という。そういう世界を体験していたのが中世の神秘家のエックハルトです。私が無教会にいた頃、神秘という言葉は無教会は嫌いだった。ところが、信交の本当の現実には神秘、ミステリオンです。

「眼光紙背に徹する」

という言葉があるけれども、聖書を読んで、その文字の奥の世界が――さっき言った響き、の世界――それが聞こえてこなければダメです。読むのではない、聞くんです。聖書を聞く、或いは聖書を食べるんです。もったいぶって聖書の解釈なんかしたってダメだ。ご苦労さんな話だ。



●聖書を身体で読む

聖書をそのように身体で読んでいたのがやはりゲーテです。彼がなぜ大詩人であるかという、そういう境地を知っている。日本の詩人にはそんなのはいないでしょう。藤村でも蘆花でも漱石でもみな一歩手前だ。漱石も、本当の悟りにとうとう来なかったと言って最後には嘆いていた。森鷗外もかなりいいけれども。

聖書を読みながら聖書の現の世界に、その中の一人物に自分を投入して読まないからダメなんだ。客観的に読んでいたら、いつまでたつてもダメです。

ペテロが舟から湖上のキリストの所へ行こうとした。始めはよかつたけれども、横を向いて波を気にしたから、沈みかけた。本当に霊の力の世界に入ると、キリストは波の上を歩いて行つた。あれは波になんか触れていない。大変なひとだ。物語ではない。あれはみな本当です。弟子たちは変化かと思つたら、キリストは、

「^{へんげ}変化ではない。私だ」

と仰つた。

聖霊の世界というのは、私たちは十字架で土台をいただいて、その十字架・聖霊の現実を限りなく進んでいくことです。何がどうなつたつて大丈夫です、人に何と言われようと大丈夫ですから。

第一流の人物はみなそういった霊的な消息を体験している人たちです。画家でも彫刻家でも詩人でも実業家でも政治家でも。リンカーンだのグラッドストーンだのビスマルクだのという、あんな偉大な政治家はいないんだ、出てこない。彼らは皆この聖書の世界を本当に身をもつて歩いていった人たちだ。日本の政治家も聖書を読むといい。私の集會に話を聞きにくるといい。聖徳太子というのは仏教に打ち込んだ人でしょ。今の皇族でも、それくらいに自分を投げ込まなければダメです。

あなた方、遠慮なしに本当のことを言いなさいよ。本当のことは、何だか知らないけれども、人に訴える。その人が始めは受けとらなくても、後で

「やはりあれは本当だな」

ということになる。

キリスト教界なんて、大体が情けない。賀川豊彦は本当に実証した人です。私は賀川さんを本当に尊敬します。彼は社会的なことをやったが、あれはみな福音の土台でやっているの、いわゆる社会主義者ではない。本当の愛の人だった。『死線を越えて』はみな彼の体験の告白ですから。

●終りなき福音の戦い

「²¹なんじの上に臨めるわが霊となんじの心に入れたるわが諸々の言は汝の口、汝の^{すえ}裔の口、汝の裔のまた裔の口から今より永遠に到るまで離れること



はない。……」（イザヤ59・21私訳）

「¹⁷然り視よ、われは新天新地を創造する。さきものは思い出されず、心にもものぼらない。……¹⁹我はエルサレムを喜び、わが民を楽しむ。もはやその中に嘆きの声も悲痛の叫びもない。²⁰日足らずして死ぬる嬰兒^{みどりご}ものちの日満たざる年寄りもその中にはない。然り、百歳にて死ぬるものも尚わかしとせられ、百歳にして死ぬるものは^{のろ}詛^{のろ}われたる罪人とせられるなり。」（イザヤ

65・17…20私訳）

これはなかなか熾んな言葉だ。私はあと十年で百歳になるけれども。数えてはしないよ、私は歳を数えるのはやめた。終りなき生涯を進んでいく。私には終りはない。ものは完成したらダメです。シューベルトの「未完成交響楽」みたいに未完成がいい。終りなき世界は未完成だ。その先は、向こう側に行つて、天界に行つて続きをやる。それくらいの雄大な人生観をもつて進まないとな。

「無数」とは面白い言葉だ。全く無数なんだ。数が無い。無数歳だ。今日は私の九十歳で、皆さんがお祝いをしてくださるけれども、これは前哨的なものだ。私は百歳を突破するつもりだから。終りなき世界です。これは使命のある限り、やります。「醉生夢死」ではしょうがない。ただ長生きしたつてしょうがない。使命のある限りどこまでもやって行きましよう。

「この福音をいい加減にしてたまるか」

というわけです。皆さんも、そういう烈々たる魂^{たましひ}之^{たましひ}霊^{たましひ}で進んでください。

九十歳なんて言つたつて、大したことはない。皆さんはまだまだ将来がたくさんある。けれども、さつきから言つていとおと、私は歳を数えないことにした。何でもいいから、目的を一つ持つて歩くことです。私にとっては詩作ですけれども。この御霊の世界は、疲れをしない。私は

「ああ、疲れた」

なんて、そんな溜め息はついたことがない。眠くはなるよ、眠くはなるから寝るけれども。自作の讚美歌を口ずさんだり、書齋が楽しい。書齋に居ながら、東西古今のいろいろな世界に飛び回っているから、昔の人とも。

とにかく、皆さんとなおこれから、終りなき福音の戦いをいたします。この集会は、その意味で、聖書の中に没入して力を得る。安息日と言つたつて、これは安息ではない。我々は聖書から力と光と生命と本当の智慧を――語るも聞くも同じこと――いただきながら進んでいく。どこまでも続けていきたいと思つています。よろしく願ひします。

*



●九十歳記念祝賀会挨拶

皆さん、誠に有り難うございます。私は正直、九十歳なんていう実感がない。九十歳のお祝いなんていわれてもピンと来ないので、申し訳ない。しかし、主にあるご友情はなによりもあり難くて、皆さんと一緒に主に感謝し、主の聖名を讃える。それだけが私の気持ちです。今日はこんなご饗宴を催していただきまして、誠に恐縮いたします。

我々キリスト召団は選びの召団です。これは我々の故ではありません。キリストの、向こうからの一方的な選びで、我々は選びの民であり遣れる民である。そういう意味において、お互いに主にあるところの自覚をいよいよ新たにし――自覚ならざる自覚ですが――一緒に、今年も次の年も限りなく前進あるのみと思っております。

お互いに躓いたり転んだりしますが、お互いに助け合って立って、そして決して後退はしない、前進していく。友情は、人の美点をみて、互いに助け合っていく。そういうことで行きたいと思います。どうせ、我々はみな不完全な罪びとですから。

しかし、この委ねられた使徒的な信交、これは決して譲ることができません。どうぞ、お一人お一人がそれぞれ自分らしい受けとり方をなさって、そして、その人らしい――お顔がみな違うように――その人らしき身証を大いにやっていきましょう。それが知らずに、キリストがコンダクターとして、大交響楽として、やってくださいますから、うれしいことです。

何はともあれ、我々は本当に聖名の故の使命がありますから、大いにこの福音を、使徒的な福音を体現していきたいと思えます。先程から、奥田先生やその他の方々、また特にK・Sさんが新しく加わりまして非常に心強く思っておりますが、お互いに機あらばお訪ねしあつて、キリストを讃美しながら進んで行きたいと思えます。よろしく願います。

「行こうか戻るか

オーロラの下を

露西亞は北国

はて知らず

西は夕焼け

東は夜明け

鐘が鳴ります

なか空に」

(独唱)

(「さすらいの唄」発表 1917年、作詞 北原白秋、作曲 中山晋平、独唱 松井須磨子)

